出会いのかけら

Columbia University
西脇　紀之
岡山大学消化器外科

コロンビア大学での留学生活も、気がつけば2年7か月が経ちました。コロンビア大学は米国ニューヨーク州ニューヨーク市マンハッタンに位置する私立大学です。私が研究を行っているHerbert Irving Comprehensive Cancer Centerのあるメディカルキャンパスは、Times Squareに代表されるマンハッタン中心部から地下鉄で約30分北上した場所にあり、周囲ではスペイン語が飛び交い、中南米系住民の多い地域に位置しています。また、キャンパスはGeorge Washington Bridgeにも近く、私を含め多くの職員がハドソン川を渡り、ニュージャージー州から通勤しています。

私たちが暮らすニュージャージー州フォートリーは、ニューヨーク市へ通勤する人々が多く暮らすベッドタウンです。日系スーパーや日本人学校へのアクセスが良好であることから、日本人が多く居住しているだけでなく、アジア系住民が全体の約44％を占める国際色豊かな街でもあります。街並みは整備され、安全で暮らしやすい環境です。私のようなポスドク研究者だけでなく、日系企業に勤務する駐在員とそのご家族も多く、日本で生活していたら出会えなかったような方々と知り合う機会に恵まれています。多くの日本人家庭は3～5年ほどで帰国されるため、この地で数多くの出会いと別れを経験してきましたが、その一つひとつが私たち家族にとってかけがえのない財産となっています。

アメリカでの生活は、驚きの連続でした。渡米当初、住居契約、運転免許の取得、車の購入など、生活基盤を整える過程で現地の方々と関わる中、日本での常識が通用しない場面を数多く経験しました。その経験を通じて、異なる文化の中で生活する難しさと、環境に適応していくことの大切さを学びました。特に実感したのは、「自分の考えをきちんと主張すること」の重要性です。当時は英語での会話に自信がなく、相手の間違いに気づいても、いずれ気づいてくれるだろうと指摘できないことがありました。しかし、自分の考えを明確に伝えることは決して失礼ではなく、むしろ建設的なコミュニケーションとして受け止められることを学びました。現地校に通う3人の子どもたちも、当初は日本との違いに戸惑いながらも、柔軟に環境へ適応し、今では日々を楽しんでいます。2年以上が経過した今も新たな発見や驚きは尽きませんが、家族全員が渡米前よりも広い視野と柔軟な価値観を身につけたと感じています。



←George Washington Bridgeと通勤に使っている自転車

研究面でも、日々新たな発見があります。私はコロンビア大学のAnil K. Rustgi研究室に所属し、炎症に起因する膵臓がんの発がん機構について基礎研究を行っています。研究室には約10名のポスドクおよびPhD課程の学生が在籍しており、それぞれ異なるテーマに取り組んでいます。出身国もアメリカ、カナダ、トルコ、スコットランド、スペイン、チリ、日本と多岐にわたり、非常に国際色豊かな研究環境です。この2年余りの間にもメンバーの入れ替わりがあり、当初のメンバーの半数ほどが入れ替わりました。研究の議論に加え、それぞれの文化や考え方の違いについて語り合う時間も多く、日々刺激を受けています。研究に対する姿勢や考え方も多様であり、その違いに触れること自体が私にとって大きな学びです。同僚たちの高い能力と仕事のスピードには驚かされることが多く、数日で数十ページのエッセイを書き上げたり、最新の実験技術やデータ解析手法を短期間で習得したりする姿を見るたび、自分が世界有数の研究環境に身を置いていることを改めて実感します。

中でも、Rustgi先生との出会いは、私の研究者としての価値観を大きく変えました。Rustgi先生は幅広い研究ネットワークを持ち、他研究室との共同研究を積極的に推進されています。研究を円滑に進めるため、外部研究者に意見を求め、協力しながら研究を進める姿勢は非常に印象的です。研究室メンバーも毎週のように共同研究者との会議に参加し、研究の進捗共有や今後の方針について議論しています。これまで私は外部研究者との共同研究の機会が限られていたため、自身の研究の要点や相手に求めることを簡潔かつ的確に伝えることの難しさ、そして重要性を改めて実感しました。またRustgi先生は、実験面だけでなく、アメリカにおける研究費獲得の仕組みや申請書作成についても熱心に指導してくださっています。研究成果を上げることだけでなく、その先にある「自立した研究者の育成」を重視する姿勢に深く感銘を受けています。そして、多くの研究室卒業生が独立し、それぞれ独自の研究グループを率いて活躍している姿を見るたび、その教育の成果を実感しています。

渡米前、私たち家族は、この留学を家族全員にとって成長の機会にしようと話し合いました。これまで大きな事故もなく、その目標に向かって着実に歩んでこられていると感じています。慣れ親しんだ日本での生活を離れ、新たな環境で生活を始めることには不安もありました。しかし、日本にいては経験できなかったこと、そして出会えなかったであろう人々との出会いこそが、この留学生活で得た何より大きな財産です。歴史的な円安や世界的な物価高、さらには第二次Donald Trump政権下における研究費削減など、研究者を取り巻く環境は決して容易ではありませんが、多くの良き出会いと支えに恵まれ、充実した留学生活を送ることができています。一つひとつの出会いのかけらが、今の私たちを形作っているように思います。

このような貴重な留学経験の機会をご支援くださった上原記念生命科学財団の皆様ならびに関係者の皆様に、心より厚く御礼申し上げます。